

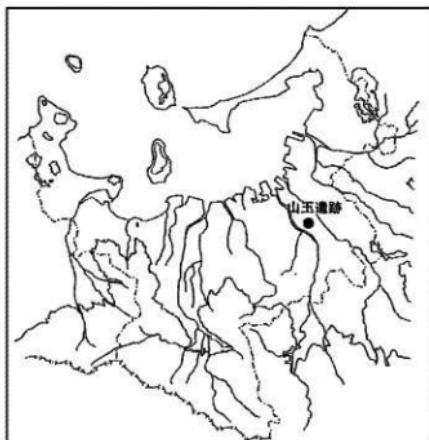
# 山王5

山王遺跡第6次調査報告書

2011  
福岡市教育委員会

SAN NOU  
山 王 5

山王遺跡第6次調査報告書



調査番号 0857  
遺跡略号 SNN-6

2011  
福岡市教育委員会



調査区南東部　弥生前期墓群近景（北東から）



弥生前期木棺墓出土副葬小壺（左から S R 19、24、18、29）

# 序

玄界灘に面する港湾都市福岡は、古来その地理的特性を生かし、朝鮮半島や中国大陆との交流を盛んに行い、発展を遂げてきました。その物的証拠として市内各地に集落跡や古墳など多数の埋蔵文化財が残されています。

しかしその貴重な先人の足跡も、近年の開発工事により失われつつあります。福岡市教育委員会は、こうしたやむをえず消滅していく埋蔵文化財を将来に伝えるため、市民の皆様のご理解とご協力に支えられ、発掘調査を実施し、記録として残す努力を続けています。

本書はその一環である山王遺跡第6次調査の成果を報告するものです。弥生時代～中世にかけての墓、竪穴住居跡、溝、井戸、柱穴など多数の遺構を確認し、土地利用の変遷が明瞭に跡付けられる成果を得ることができました。特に弥生時代前期にさかのほる木棺・甕棺からなる墓群は、山王遺跡では初めての発見であり、周辺地域を含めても希少で、基準資料となりうるものです。

最後に今回の発掘調査にご協力いただいた株式会社大島ならびに周辺住民の皆様に感謝の意を表します。

平成23年3月18日

福岡市教育委員会  
教育長 山田 裕嗣

## 例 言

1. 本書は共同住宅建設に伴い、福岡市博多区山王1-56、57、60-2、61において実施した山王遺跡第6次調査の報告である。

2. 検出遺構はピットとそれ以外のものとに分け、それぞれ通し番号とし、以下の略号を付した。

ピット SP 壁穴住居 SC 渓 SD 井戸 SE 土坑・土坑墓 SK 豊棺墓 ST  
木棺墓 SR 掘立柱建物 SB

3. 遺構の実測は木下博文・本田浩二郎が行った。

4. 遺構・遺物の写真撮影、遺物の実測、製図、探拓は木下博文が行った。なお石鏡の実測は山口謙治、製図は山口朱美が行った。

5. 本書で用いる方位は磁北であり、真北から6° 21' 西偏する。また座標は日本測地系第II系である。

6. 本文・挿図・図版における遺物番号は通し番号とし、それぞれ対応する。

7. 遺構の解釈、遺物の分類・編年などについて、以下の文献を参考とした。

太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-』2000年

中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995年

春日市教育委員会『伯元社遺跡』春日市文化財文化財調査報告書第35集 2003年

橋口達也『豊棺と弥生時代年代論』雄山閣 2005年

山崎純男『弥生文化成立期における土器の編年の研究-板付遺跡を中心としてみた福岡・早良平野の場合』『鏡山猛先生古稀記念・古文化論叢』1980年

吉留秀敏『板付式土器成立期の土器編年』『古文化論叢』32 1994年

8. 本書に関わる図面・写真・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。

9. 本書の執筆・編集は木下博文が行った。

調査番号	0857	遺跡略号	SNN-6	分布地図番号	37 東光寺 2379
所在地	博多区山王1-56、57、60-2、61			事前審査番号	20-2-538
開発面積	1684.21m <sup>2</sup>	調査対象面積	577.21m <sup>2</sup>	調査面積	580m <sup>2</sup>
調査期間	2009.2.16~4.23				

## 本文目次

第1章 はじめに .....	1
1 調査に至る経緯	
2 調査体制	
第2章 遺跡の位置と環境 .....	1
第3章 調査の記録 .....	4
調査の概要	
遺構と遺物 .....	7
木棺墓	
甕棺墓	
土坑・土坑墓	
井戸	
竪穴住居	
溝	
掘立柱建物	
その他の出土遺物	
第4章 まとめ .....	27

## 挿図目次

図1 遺跡の位置 (S=1/25000) .....	2
図2 調査地点位置図 (S=1/4000) .....	3
図3 調査区位置図 (S=1/500) .....	4
図4 遺構配置図 (S=1/200) .....	5
図5 調査区西壁・南壁土層断面図 (S=1/60) .....	6
図6 SR18・19および出土遺物実測図 (S=1/30、1/3、1/2) .....	8
図7 SR24・25・26および出土遺物実測図 (S=1/30、1/3) .....	9
図8 SR27・28および出土遺物実測図 (S=1/30、1/2) .....	10
図9 SR29および出土遺物実測図 (S=1/30、1/3、1/2) .....	11
図10 ST09実測図 (S=1/20) .....	12
図11 ST12および出土遺物実測図 (S=1/20、1/4) .....	13
図12 ST17および出土遺物実測図 (S=1/20、1/4) .....	14
図13 ST30および出土遺物実測図 (S=1/20、1/4) .....	15
図14 SK08・13実測図 (S=1/30) .....	16
図15 SK08・13出土遺物実測図 (S=1/3) .....	17
図16 SK20・23・36実測図 (S=1/30) .....	18
図17 SE05・16実測図 (S=1/40) .....	19
図18 SE14・15・33および出土遺物実測図 (S=1/40、1/3、1/1) .....	20
図19 SC21および出土遺物実測図 (S=1/40、1/2) .....	21
図20 SD03・10および溝出土遺物実測図 (S=1/40、1/3、1/2) .....	23

図21	S B40実測図 (S=1/60) .....	24
図22	S B41・42実測図 (S=1/60) .....	25
図23	S B40・41出土遺物実測図 (S=1/3) .....	26
図24	その他の出土遺物実測図 (S=1/1) .....	26

## 図 版 目 次

図版1	調査区全景 (北東から) 調査区南壁土層断面 (北から) .....	29
図版2	S R18 (東から) S R18副葬小壺出土状況 (東から) S R18土層断面 (北から) .....	30
図版3	S R19 (東から) S R19副葬小壺出土状況 (西から) S R19上層断面 (南から) .....	31
図版4	S R24 (東から) S R24土層断面 (南から) .....	32
図版5	S R25 (南から) S R25土層断面 (南から) .....	33
	S R26 (南から) S R26土層断面 (南から)	
	S R27 (北から) S R27土層断面 (東から)	
	S R28 (北から) S R28土層断面 (東から)	
図版6	S R29 (北から) S R29土層断面 (東から) .....	34
図版7	S T09 (東から) S T09墓坑 (東から) .....	35
	S T12 (東から) S T12墓坑 (東から)	
	S T17 (北西から) S T17墓坑 (北西から)	
	S T30 (南から) S T30墓坑 (西から)	
図版8	S K08 (南東から) S K13 (南東から) .....	36
	S K20 (北東から) S K23 (東から)	
	S E14 (南東から) S E14土層断面 (南西から)	
	S E15 (南東から) S E16 (南東から)	
図版9	S E05 (北東から) S E33 (北西から) .....	37
	S C21 (南から) S D01 (南東から)	
	S D03 (南から) S D03土層断面 (南から)	
	S D04 (南から) S D06 (北西から)	
図版10	S D10 (南東から) S D11 (西から) .....	38
	S B40 (西から) S B40南西隅 SP454 青出土状況 (西から)	
図版11	出土遺物1 .....	39
図版12	出土遺物2 .....	40

# 第1章 はじめに

## 1. 調査に至る経緯

2008(平成20)年10月6日、株式会社大島（代表取締役 大島康彦氏）より福岡市教育委員会宛に福岡市博多区山王1-56、57、60-2、61における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無について照会があった（事前審査番号20-2-538）。申請地は山王遺跡の範囲内にあることから、協議の上2009(平成21)年1月15日に試掘調査を行った。その結果現地表面下20~50cmにて遺構面を確認した。今回は設計変更不可能のことから、発掘調査を実施することとなった。

本調査は2009(平成21)年2月16日にバックホウによる表土剥ぎより着手、4月23日に終了した。

## 2. 調査体制(当時)

申請者 株式会社大島 代表取締役 大島康彦  
調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課  
調査総括 埋蔵文化財第2課長 田中壽大  
同調査第1係長 杉山富雄  
調査庶務 文化財管理課管理係 井上幸江  
事前審査 埋蔵文化財第1課事前審査係 藏富士寛  
調査担当 調査第2係 木下博文  
調査作業 唐島栄子 桑原美津子 林厚子 布江孝子 岡部安正 片岡博 石田和子 相川春彦  
河原明子 前田佳代 平田周二 西美由喜 上野照明 林春治郎 大坪和彦 永井泉  
金有正 犬原俊夫 中村桂子 小野千佳  
整理作業 庄島さよ子 大岡由紀子 高野四郎 松尾トシエ 富田文代

調査にあたり、調査区外柵・ユニットハウス・仮設トイレ・電気・水道の現物提供を受けた。申請者の株式会社大島ならびに周辺住民の方々の御協力・御理解により、調査が実施できたことをここに記し、感謝申し上げます。

# 第2章 遺跡の位置と環境

福岡平野の中央部、博多湾に向かって北西に流れる御笠川と那珂川に挟まれた地域には、阿蘇山火砕流堆積物起源の鳥栖ローム、八女粘土層を基盤とする台地が春日市須玖から福岡市博多駅南地区にかけて延びている。この台地上には「後漢書」・「三国志」といった中国の史書に記載される奴国の中心部と目されている須玖遺跡群、日本最古級の環濠集落で、縄文晩期にさかのぼる水田の検出で著名な板付遺跡、朝鮮半島の無文土器が出土した諸岡遺跡など、弥生時代を中心として対外交流や基層文化を考察する上で見過ごすことのできない重要遺跡が密集している（図1）。

その遺跡群のうち、北西端に位置する比恵・那珂遺跡群では、道路・環濠住居・墳丘墓など弥生時

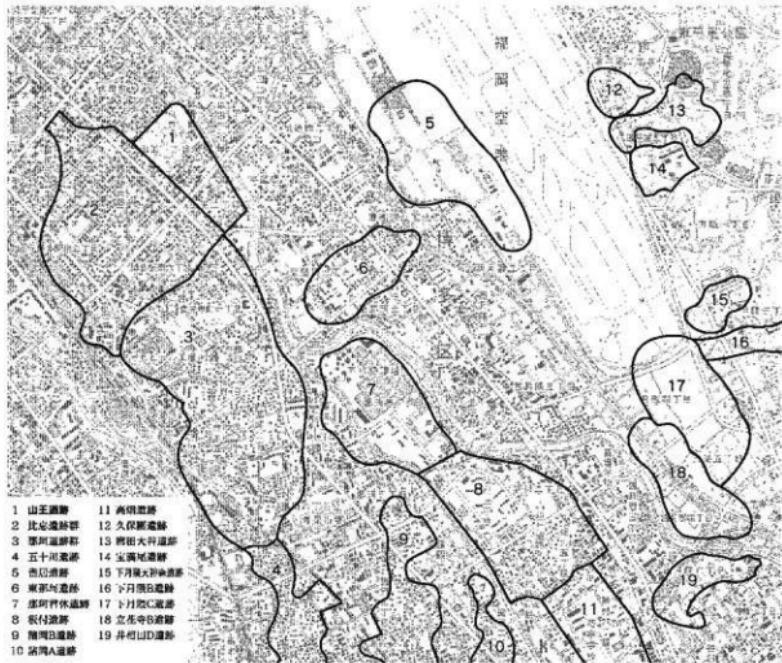


図1 遺跡の位置 (S=1/25000)

代の遺構が集中し、古くより注目され、その整然とした様相は近年都市との評価もなされている。今回報告と関連するところでは、筑葉通り沿い、那珂交差点北西側にあたる那珂31次調査で弥生前期後半の木棺墓2・整棺墓1が検出されている。

また時代が下って古墳後期、春住小学校の南西側にあたる比恵8・72次調査では三本柱からなる柵列で取り囲まれた倉庫群が検出され、「日本書紀」に記載される那津官家の有力候補地として保存されている。

今回調査対象となる山王遺跡は、比恵遺跡群とは谷を挟んで東方に、那珂遺跡群の北方に隣接し、東側は御笠川と接する。以前は地表面採集資料により山王斎棺遺跡と呼称されたが、比恵斎棺遺跡と合わせて山王遺跡と呼称することとなり、現在に至っている。これまでに計5回の調査が実施されており、弥生から中世までの遺構・遺物が確認されている。3次調査では東西方向の溝・波板状遺構が検出されており、12世紀代の道路跡と報告されており、同時期の井戸から木製の独楽が出土している。4次調査では弥生時代前期の貯蔵穴、同後期～終末および古墳時代の竪穴住居、古墳時代初頭の井戸などを検出している。

今回の調査地点は遺跡の東端部中央に位置し、すぐ東側に御笠川が流れる標高5.5～6.5m程度の地点である(図2)。4次調査地点とは道路を挟んで北側に位置する。



図2 調査地点位置図 ( $S=1/4000$ ) 破線は旧比恵甕棺遺跡 ドットは甕棺検出地点

## 第3章 調査の記録

### 1. 調査の概要

調査は共同住宅の建設範囲580m<sup>2</sup>を対象とし、2009年2月16日に重機による表土剥ぎから着手した。現地表の標高は調査区東隅で5.85m、西隅で5.72mである。試掘調査では現地表面下20~50cmの鳥栖ローム層上面で土坑・ピット等の遺構が確認されている。遺構面の鳥栖ローム層は、調査区の北西辺中央がGL-10cmと最も浅く、それに対する南東辺中央がGL-60cmと最も深い。また北西半が赤褐色、南東半が黄褐色を呈している。

遺構密度は大変濃く、調査区全面に広がり、時代も弥生から近世と幅が広い（図4）。その内訳は、弥生前期の木棺墓8、甕棺墓4、中期の竪穴住居1、井戸2、後期の掘立柱建物2、古墳時代の溝2、平安から中世の溝4、井戸3、土坑墓2、土坑3、掘立柱建物1、中世以降の溝2、各時代のピットは遺物が出土したもののみで計577である。遺構の削平・切り合いによる搅乱の度合いは大きく、甕棺墓・土坑墓・竪穴住居の上部は大きく失われている。この中で、弥生時代の遺構は調査区の南寄りに集中

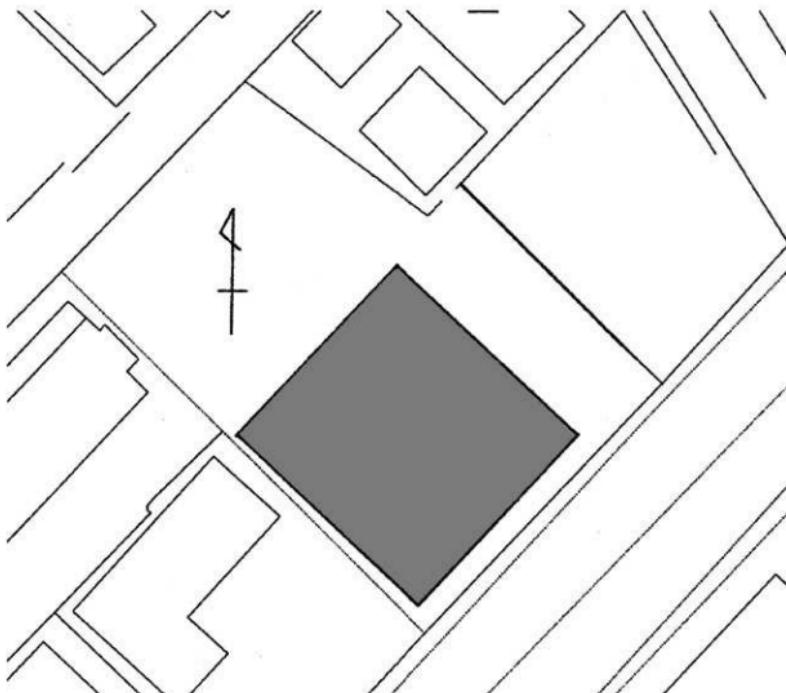


図3 調査区位置図 (S=1/500)

する傾向がある。

出土遺物は弥生土器、上師器、須恵器、中国産磁器を中心とし、石器、土製品、鉄製品が出土しており、総量は中コンテナ35箱分である。石器は玄武岩製の磨製石斧2、黒曜石製の打製石鎌1、同剥片、滑石製の鏡、同白玉1、土製品は投弾3、鍼3である。

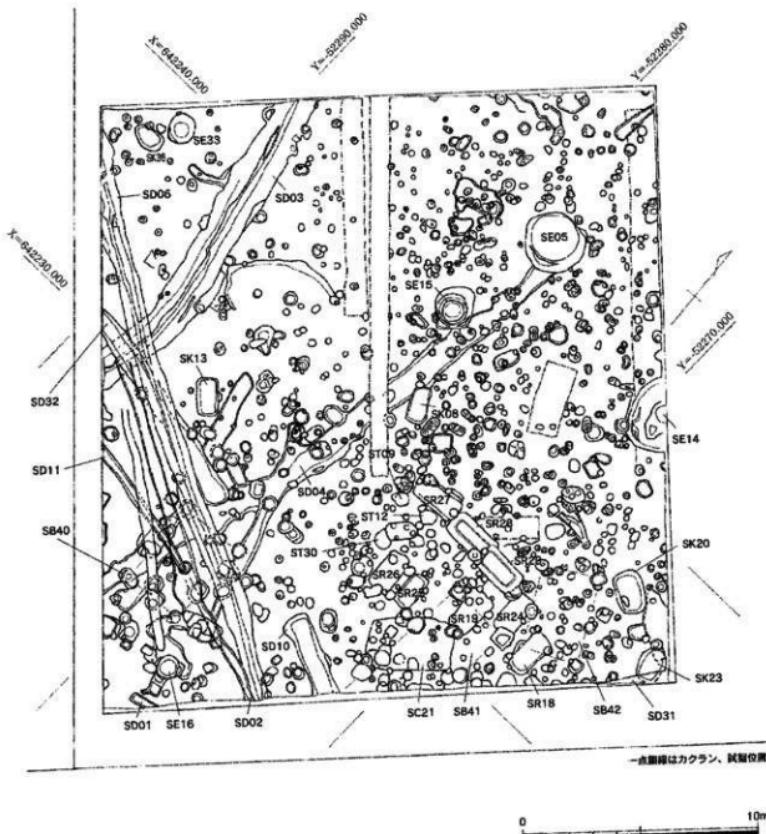


図4 遺構配置図 ( $S = 1/200$ )

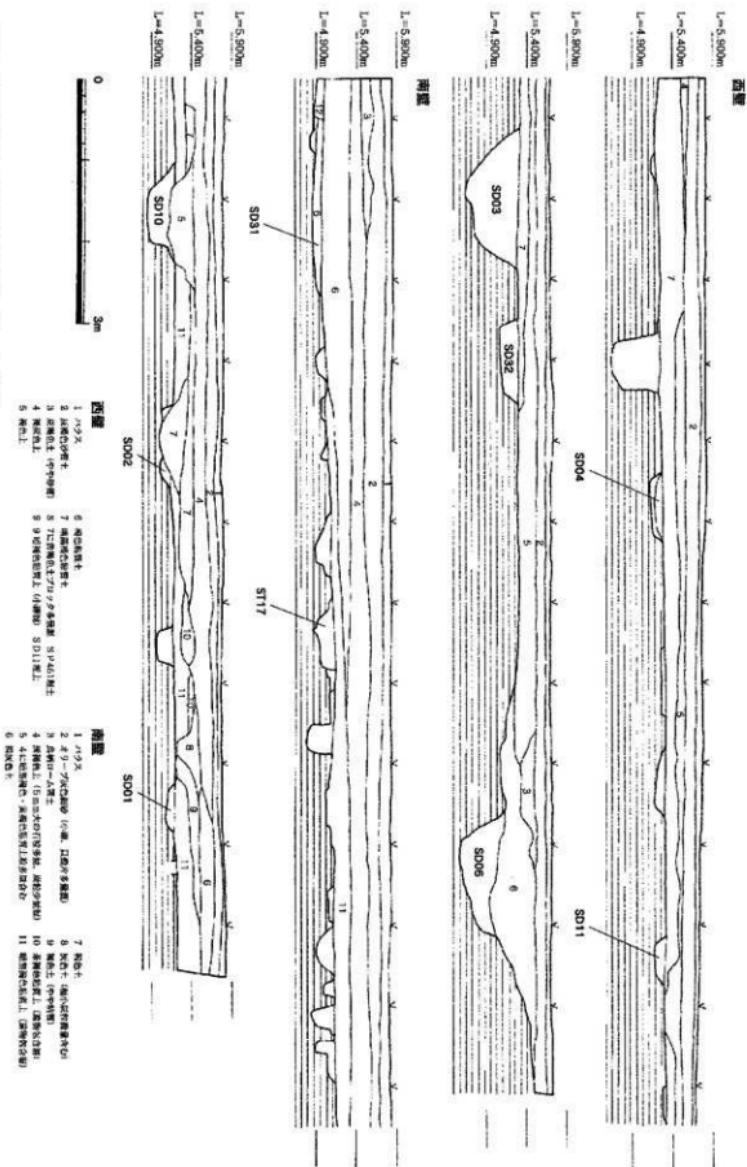


図5 調査区西壁・南壁土層断面図 ( $S = 1/60$ )

## 2. 遺構と遺物

### 木棺墓

#### S R18 (図6、図版2)

1.95×1.18mの南北軸の長方形で、深さ0.5mである。南西隅からやや北寄りの壁際に小壺を置いていることから、南頭位とみられる。弥生前期後半に属す。

#### 出土遺物 (図6、図版11)

1は弥生前期後半の小壺である。口径10.8cm、器高19.0cm、底径7.0cm、胴部最大径18.2cm、淡褐色で黒斑がある。胎土は1~3mm大の白色砂粒を多量に含む。肩部に2条および1条の沈線で区切り、その間にヘラ描きの有輪羽状文を施す。胴部外面は横方向、頸部にヘラミガキを施す。

#### S R19 (図6、図版3)

1.9×0.98mの南北軸の長方形で、深さ0.27mである。南西隅から0.3m巾よりの位置に小壺を置くことから、南頭位とみられる。弥生前期中葉に属す。

#### 出土遺物 (図6、図版11・12)

2は弥生前期中葉の小壺である。口径8.0cm、器高15.0cm、底径5.8cm、胴部最大径13.5cm、浅黄橙色で頸部から肩部にかけて黒斑がある。胎土は精良である。胴部外面にヘラミガキを施す。円盤貼り付けの底部や頸部と胴部の境が明瞭であるなど、板付1式の特徴をよく残している。3は用途不明の輪状鉄製品である。最大径4cm。径1.5cmの鉄棒を曲げて輪状にしている。S R19を切るビットの外側に残したベルト除去時に出土した。位置は遺構図中の破線で示した個所である。S R19の土層ベルトを除去後、その下に土坑があることが判明した。遺構検出・精査時に認識できなかった後世の土坑があり、出土位置から鉄製品もそれに伴うもので、S R19に伴うものとは考えないのが、現状の鉄器初現期問題を考慮して妥当と判断している。

#### S R24 (図7、図版4)

1.8×1.0mの南北軸の長方形で、深さ0.6mである。南西隅、底面から25cm浮いた位置に小壺を置くことから、南頭位とみられる。弥生前期中葉に属す。

#### 出土遺物 (図7、図版11)

4は弥生前期中葉の小壺である。復元口径9.6cm、器高18.5cm、底径6.4cm、胴部最大径16.5cm、褐色で胴部に黒斑がある。胎土は精良である。胴部外面に横方向のヘラミガキを施す。底部内面に円盤高台の貼り付け痕をそのまま残す。

#### S R25 (図7、図版5)

1.56×0.78mの南北軸の長方形で、深さ0.47mである。時期決定の有力な遺物はないが、遺構の主軸・規模・覆土からみて、S R18・19・24と一体性がうかがえる。弥生前期とみてよいものと考える。

#### S R26 (図7、図版5)

1.84×1.0mの南北軸の長方形で、深さ0.2mである。後世のビットによる擾乱があり、遺物が混入しているが、遺構の主軸・規模から S R18・19・24と一体性がうかがえる。弥生前期とみてよいものと考える。

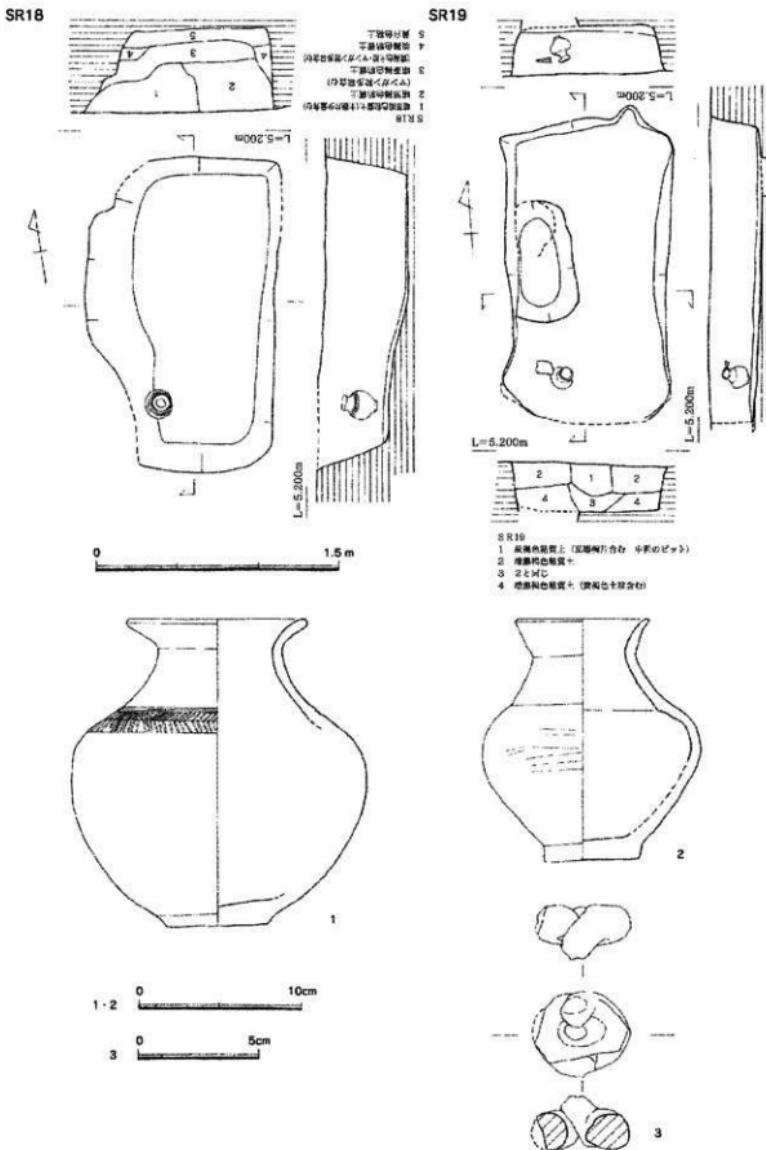


図6 SR18・19および出土遺物実測図 (S=1/30, 1/3, 1/2)

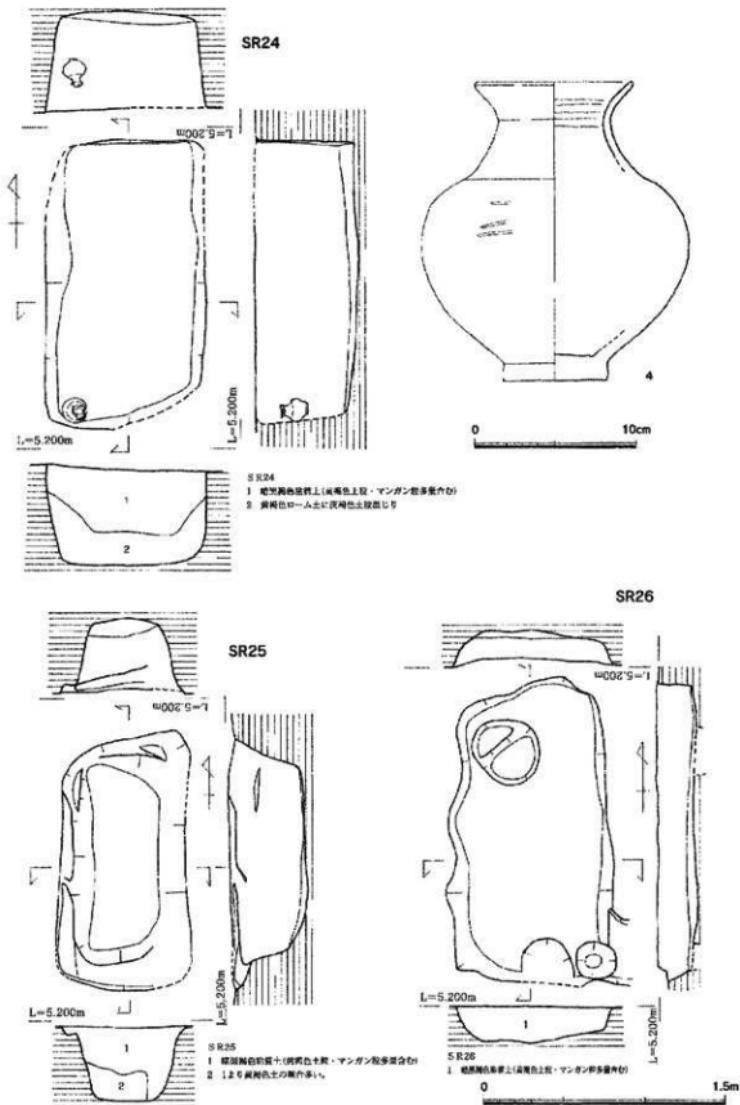


図7 S R24・25・26および出土遺物実測図 (S=1/30、1/3)

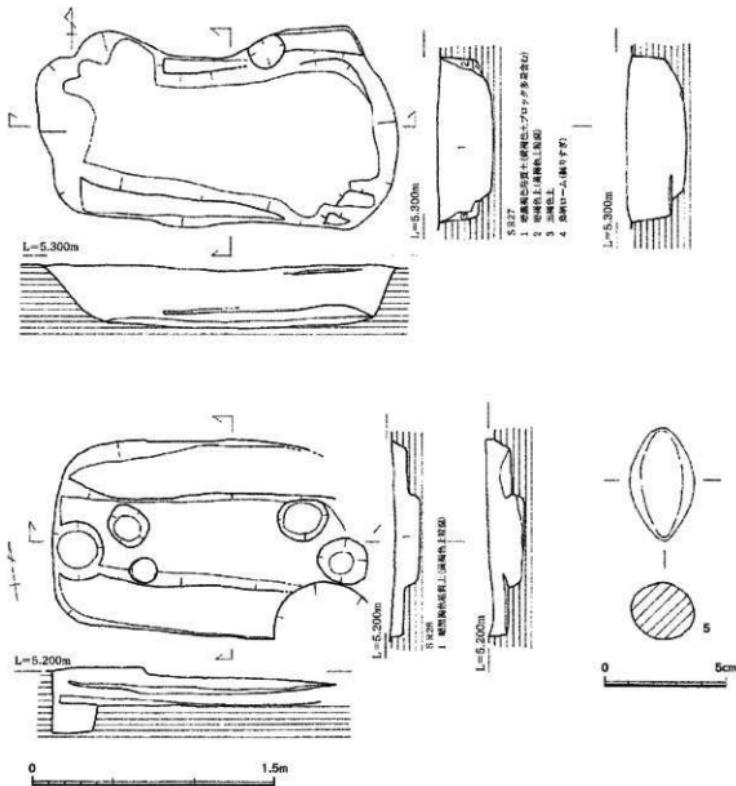


図8 SR27・28および出土遺物実測図 ( $S = 1/30, 1/2$ )

#### SR27 (図8、図版5)

$2.2 \times 1.04\text{m}$ の東西軸の長方形で、深さ $0.35\text{m}$ である。わずかに二段掘りの痕跡があり、木棺墓かとみられる。後世のビットに切られており、その遺物が混入しているが、SR28・29と遺構の主軸と規模がほぼ同一であり、一体性がうかがえる。弥生前期とみてよいものと考える。

#### SR28 (図8、図版5)

$1.8\text{以上} \times 1.21\text{m}$ の東西軸の長方形で、深さ $0.2\text{m}$ である。SR29を切る。2段掘りの墓坑で、 $1.75\text{m} \times 0.58\text{m}$ 、深さ $0.08\text{m}$ の落ち込みがあり、木棺痕跡とみられる。

#### 出土遺物 (図8、図版12)

5は土製投弾である。長さ $4.65\text{cm}$ 、最大幅 $2.6\text{cm}$ 、厚さ $2.3\text{cm}$ 、重さ $21.0\text{g}$ である。褐色で黒斑がある。

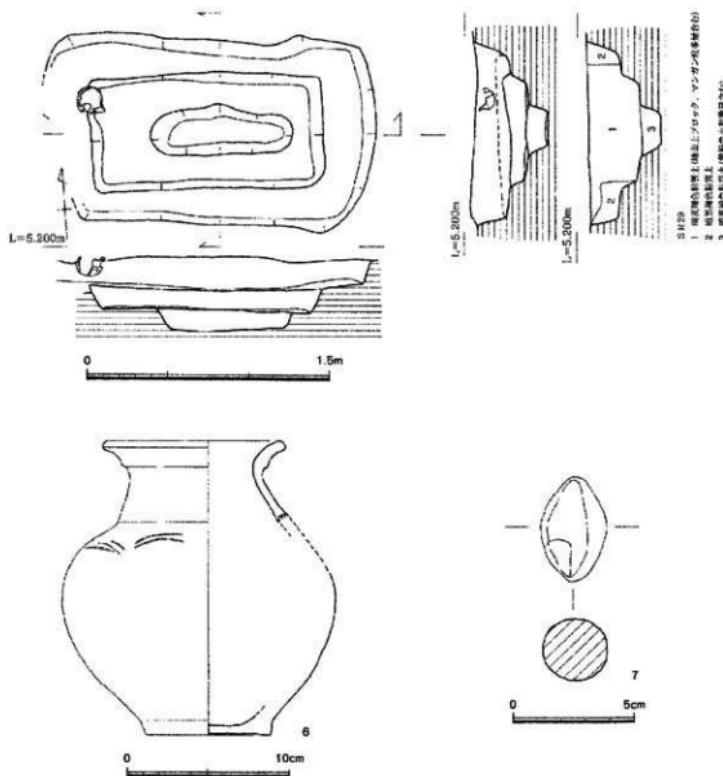


図9 SR29および出土遺物実測図 (S=1/30, 1/3, 1/2)

#### SR29 (図9、図版6)

2.7×1.15mの東西軸の長方形で、深さ0.2mである。内部に1.47×0.7m、深さ0.11mの落ち込みがあり、木棺痕跡とみられる。木棺痕跡の北西隅に小窓を置くことから、西頭位とみられる。東半上層より土製投弾1点が出土している。

#### 出土遺物 (図9、図版11・12)

6は弥生前期中葉の小壺である。復元口径10.7cm、器高18.2cm、底径7.6cm、胴部最大径16.9cm、橙色で胴部下半に黒斑がある。胎土は1~3mmの大白色砂粒を多量含む。肩部に貝殻腹線によるとみられる2ないし3重の弧文を施す。調整は胴部下半がヘラミガキ、それ以外はなでとみられる。

7は土製投弾である。長さ4.3cm、最大幅2.65cm、厚さ2.5cm、重さ23.5gである。暗褐色である。

## 壇棺墓

### S T09 (図10、図版7)

墓坑は長径0.77cm、短径0.57cmの楕円形で、深さ0.23cm。削平が著しく、下壺の脛部片しか残存しない。弥生前期とみられる。

### S T12 (図11、図版7)

覆口式の小児棺で、鉢を上壺、壺を下壺とする。墓坑は長径0.65m、短径0.59mの楕円形で、深さ0.26cm。埋置角度は11°。3ヶ所須恵器を含む後世のピットで擾乱を受けている。弥生前期中葉～後葉に属す。

### 出土遺物 (図11、図版11)

8は鉢である。復元口径28.4cm、残存高16.3cm、褐色で内面に黒斑がある。胎土は1mm大の白色砂粒を少量含む。口縁部の上下端に刻目を施す。調整は内外面ともに、口縁部がハケ目の後なで消し、体部がヘラミガキである。9は壺である。復元口径27.0cm、器高43.3cm、底径10.2cm、胴部最大径37.4cm。橙色で黒斑がある。頸部と脛部の境に沈線を施す。胎土は1～3mm大の白色砂粒を多量に含む。体部外面は器面荒れで調整が分かりにくい。頸部はミガキか。体部内面および底部はなでである。

### S T17 (図12、図版7)

調査区南東辺で検出した。調査区外に一部入っているが、中型壺を用いた单棺である。長径0.75cm以上、短径0.74mの楕円形で、深さ0.29cm。埋置角度は14°。弥生前期後半に属す。

### 出土遺物 (図12、図版11)

10は壺である。復元口径40.4cm、器高61.3cm、底径12.4cm、胴部最大径51.4cm。浅黄橙色で胴部の最大径部に黒斑がある。胎土は1～3mm大の白色砂粒を多量含む。調整は体部内面・口縁部がなで、体部外面はヘラミガキか。底部と体部の接合部は縦方向のハケ目を施した上でなで消している。口縁部外面の下端に刻目を施し、内面を肥厚させている。横口縁年のK I a式に相当するものとみられる。

### S T30 (図13、図版7)

覆口式の小児棺で、鉢を上壺、壺を下壺とする。墓坑は長径0.67m以上、短径0.63mの楕円形で、深さ0.28cm。埋置角度は30°。後世のピットで下壺の脛部に擾乱を受けている。弥生前期後半に属す。

### 出土遺物 (図13、図版11)

11は鉢である。復元口径32cm、残存高15.6cm。浅黄橙色で体部外面に黒斑がある。胎土は1～3mm大の白色砂粒を多量含む。調整は内外面とともに口縁部が横なで、体部がヘラミガキである。12は壺である。復元口径29.4cm、器高42.0cm、底径12.5cm、胴部最大径35.9cm。橙色で1～5mm大の白色砂粒を多量に含む。体部は横方向のヘラミガキ、底部から体部上方に向かって縦方向のハケ目を施す。



図10 S T09実測図 (S=1/20)

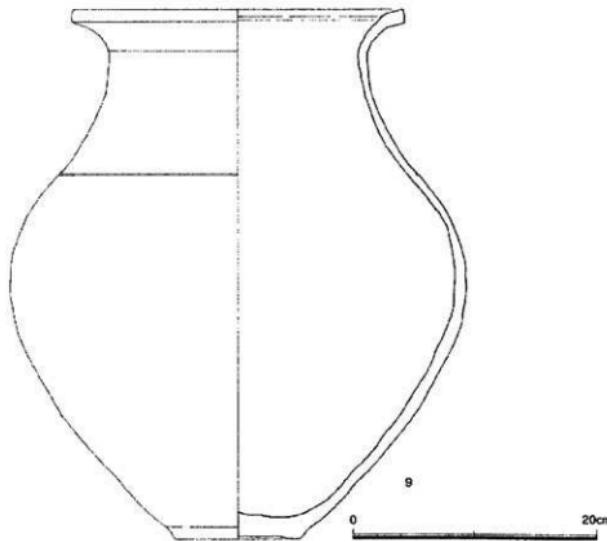
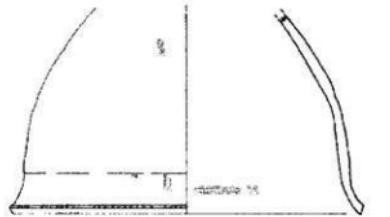
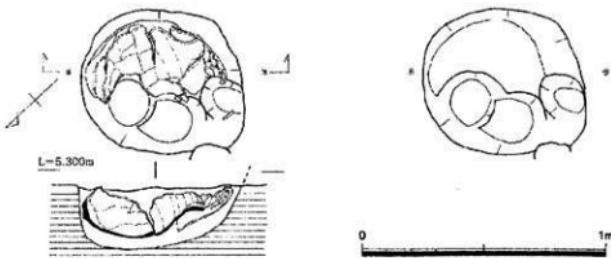


図11 ST12および出土遺物実測図 ( $S=1/20, 1/4$ )

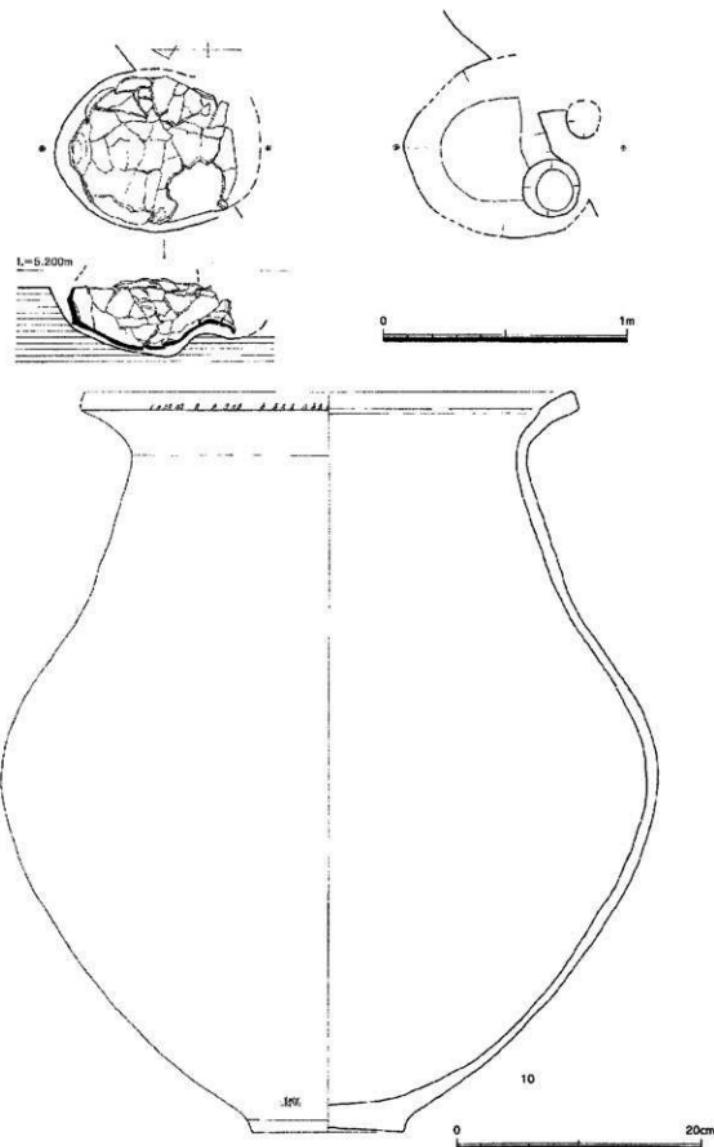


図12 ST 17および出土遺物実測図 (S = 1/20, 1/4)

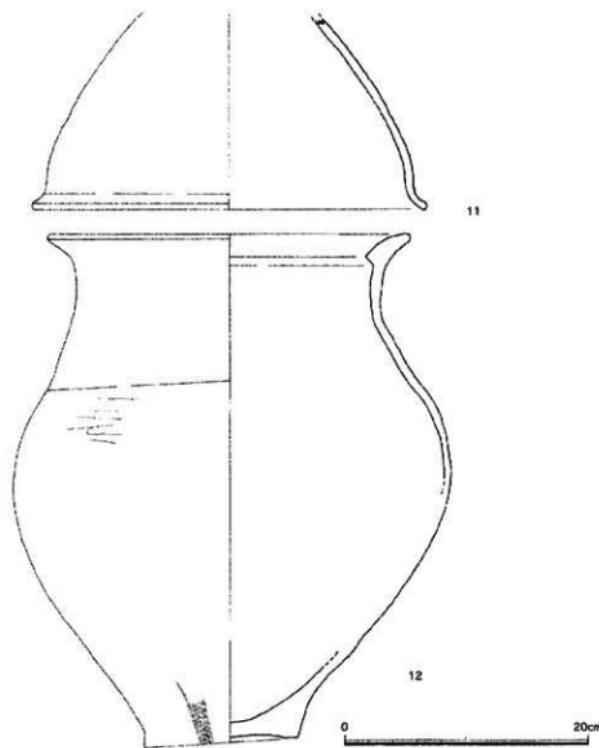
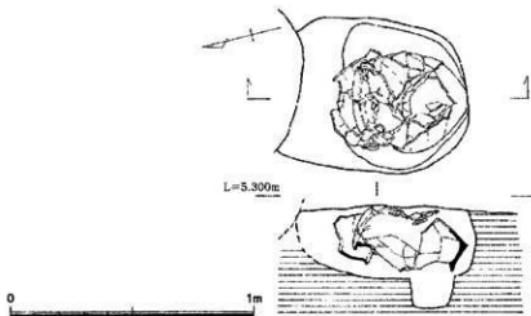


図13 ST 30および出土遺物実測図 (S=1/20, 1/4)

## 土坑・土坑墓

### SK08 (図14、図版8)

調査区中央で検出した土坑墓で、SD04を切る。1.6×0.7mの南北軸の長方形で、残存の深さは0.1mである。北東隅に黒色土器椀を下、土師器皿を上にして重ね置きすることから、北頭位とみられる。

### 出土遺物 (図15、図版12)

13・14は土師器皿である。13は口径10.0cm、器高1.6cm、灰色で0.5mm大の白色砂粒を少量含む。14は復元口径9.4cm、器高1.1cm、灰白色で1~2mm大の白色砂粒を微量含む。底部の調整は13が回転ヘラ切り・板状圧痕あり、14は回転ヘラ切りのみである。15は黒色土器椀である。口径16.2cm、器高6.7cm、高台径6.0cm。体部内面および体部外面上端が黒灰色、体部下半は浅黄橙色である。胎土は1~2mm大の白色・透明砂粒を多量含む。調整は体部内面を一部ヘラミガキ、その他はなでである。

### SK13 (図14、図版8)

調査区中央西寄りで検出した土坑墓である。1.62×0.87mの南北軸の長方形で、残存の深さは0.2mである。北西隅に土師器皿6枚を配置することから北頭位とみられる。長さ1.36m、幅5cm強の炭化材が30~40cmの間隔で並んで残存する。炭化材には欠き込みや方形の仕口があることから、遺体を運ぶ際に使用された担架状の構造材とみられる。

### 出土遺物 (図15、図版12)

16~20は土師器皿である。色調は16・18が褐色、17・20が橙、19が浅黄橙である。底部の調整は16~19までが回転糸切りのみ、20はなでとみられる。

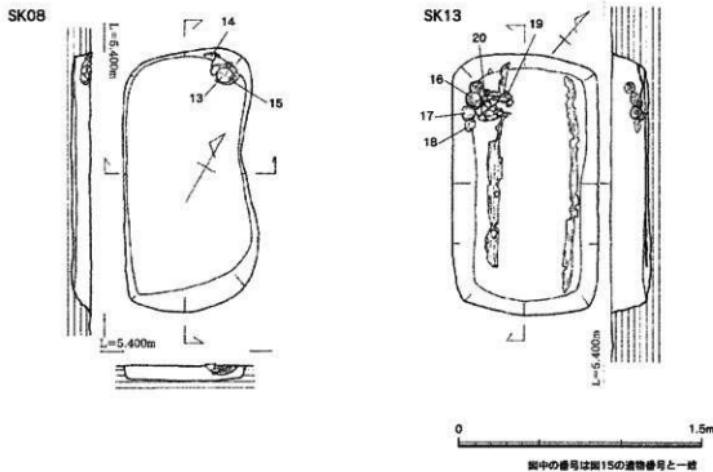


図14 SK08・13実測図 (S=1/30)

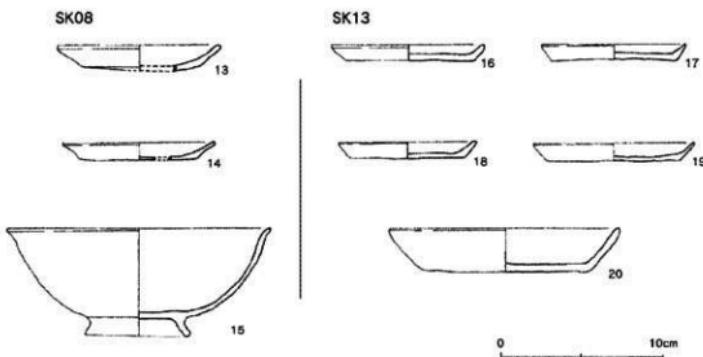


図15 SK08・13出土遺物実測図 (S=1/3)

#### S K20 (図16、図版8)

調査区東端で検出した。1.8×1.2mの隅丸長方形で、深さ0.43mである。回転糸切り・板状圧痕ありの土師器皿、白磁碗、同安窯系青磁碗、瓦器碗、須恵器、滑石製鍋、黒曜石片2が出土している。平安後期に属す。

#### S K23 (図16、図版8)

調査区東隅で検出した。長軸1.55m、短軸1.1mの梢円形で、深さ0.27cmである。SD31に切られる。青磁・白磁片、須恵器片、土師器皿が出土している。中世に属す。

#### S K36 (図16)

調査区西隅で検出した。東西長1.73m、南北幅1.16mの梢円形で、深さ0.83mである。須恵器片が出土している。中世か。

#### 井戸

#### S E05 (図17、図版9)

調査区北半中央で検出した。径2.56m、深さ1.3mである。精査時一段下りでローム土とみられる面が現れたため浅い窪みとみられたが、掘り下りの結果さらに下に黒褐色粘質土が堆積しており、深い井戸となることが判明した。底面は八女粘土上面で止まっており、湧水層にまで達していないため、涌井か。遺物は上層で須恵器・土師器片が出土している。後述するSD04がSE05付近で止まっており、それに関わるものであろう。中層では弥生の平底土器片、黒曜石1、下層で弥生の上げ底土器片、黒曜石1が出土している。弥生時代中期から後期に属す。

#### S E16 (図17、図版8)

調査区南隅で検出した。径1.0m、深さ1.18mの素掘りである。南側に降り口のような段が取りついている。遺物は弥生土器甕の錐形口縁部が出土している。弥生時代中期に属す。

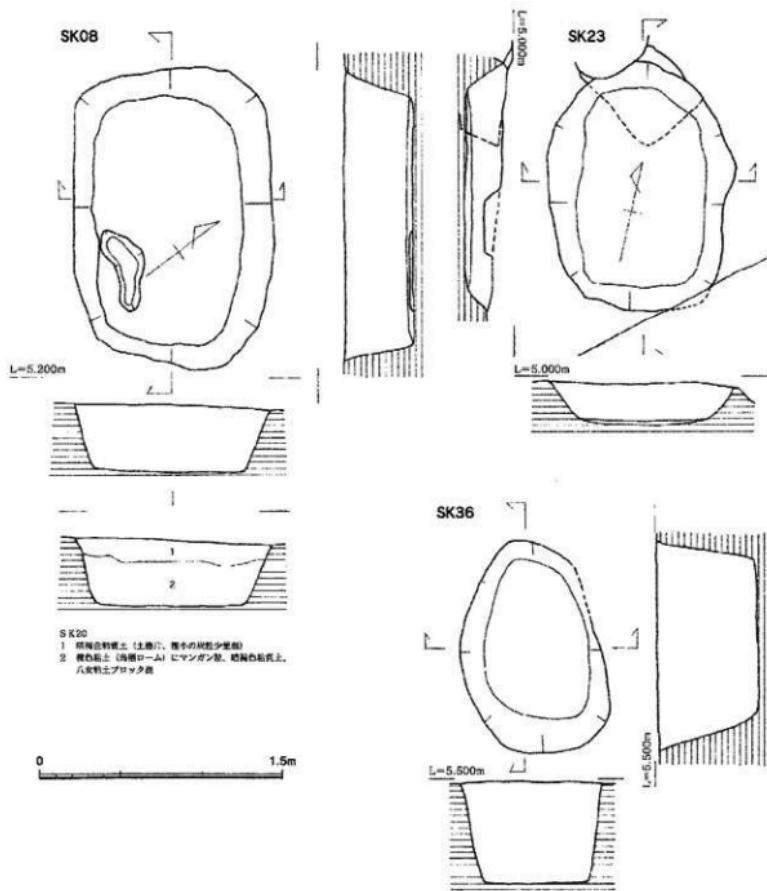


図16 SK20・23・36実測図 ( $S=1/30$ )

#### S E 14 (図18、図版8)

調査区北東辺で検出した。径3.2m、深さ2.0m、2段掘りとなっており、井筒があったものとみられる。遺物は滑石製の鍔付鍋、龍泉窯系青磁碗のI-4 b類、同安窯系青磁碗・皿、青白磁壺形合子の身1、須恵器甕の口縁部、陶器水注の把手1、土師器皿が出土している。平安時代末期に属す。

### S E15 (図18、図版8)

調査区中央やや北寄りで検出した。径1.75m、深さ2.65mの素掘りである。遺物は白磁碗V-4 b類、玉縁の口縁部、陶器鉢、陶器四耳壺の耳部分、滑石製鏡、土師器皿、銅錢1が出土している。平安時代末期に属す。

### 出土遺物 (図18、図版12)

21~24は土師器皿である。21は復元口径9.4cm、器高1.0cm。22は復元口径8.2cm、器高1.0cm。23は口径8.6cm、器高1.0cm。24は復元口径15.5cm、器高3.0cm。色調はいずれも浅黄橙色、胎土は23・24が1mm大の白色砂粒を少量含む。底部調整は21・22・24が回転糸切り痕・板状圧痕あり、23はなでとみられる。25は銅錢である。径2.8cm、「紹聖元寶」で初鑄年は北宋の紹聖元(1094)年である。銹化が進み、かなり脆い。26は滑石製の鏡である。後述するS D10の出土品と接合した。両構が同時期に機能、廃棄されたものとみられる。

### S E33 (図18、図版9)

調査区西側で検出した。径1.3m、深さ1.37mの素掘りである。遺物は白磁碗の玉縁口縁部、上層で瓦器碗が出土している。中世初頭に属す。

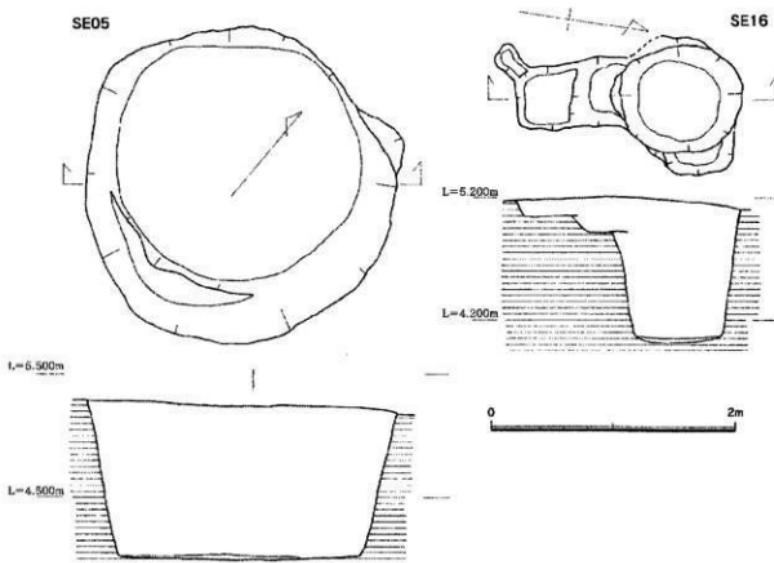


図17 S E05・16および出土遺物実測図 (S=1/40, 1/3)

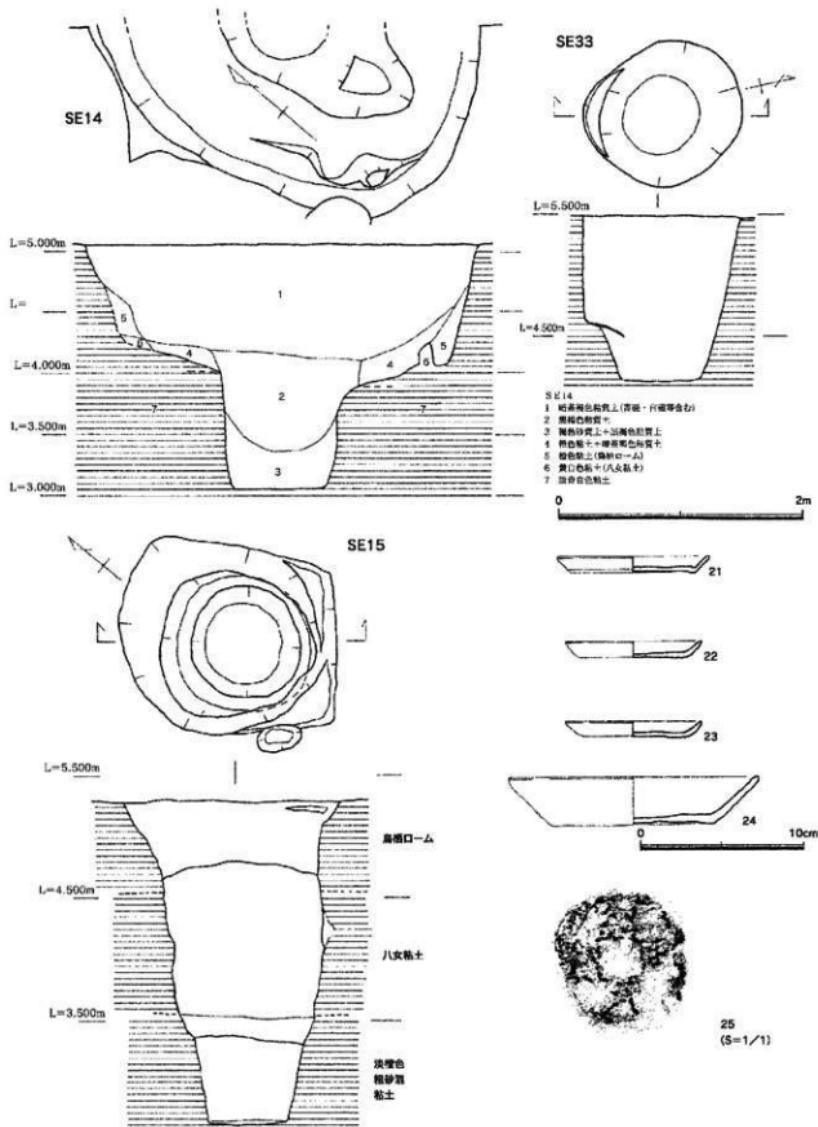
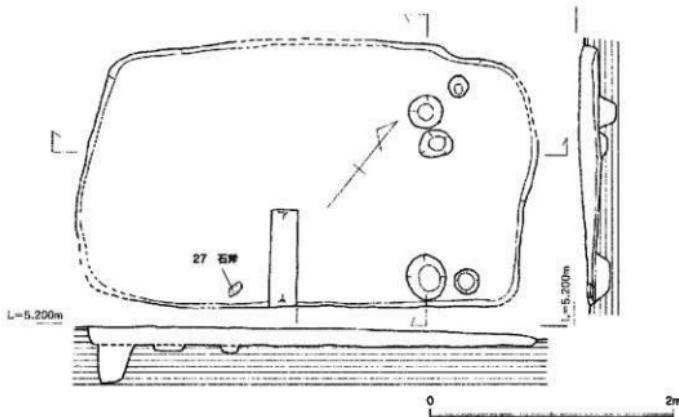


図18 SE14・15・33および出土遺物実測図 ( $S=1/40, 1/3, 1/1$ )



### 竪穴住居

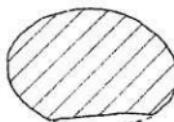
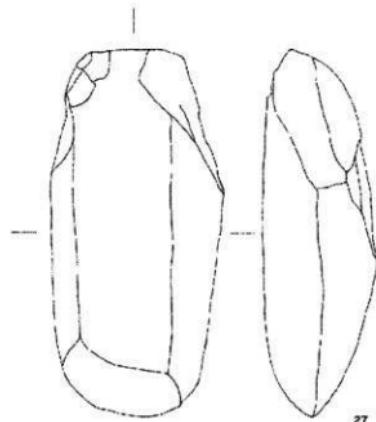
SC21 (図19、図版9)

調査区南東辺で検出した。3.66m×2.2mの長方形で、後世の削平により、残存の深さは10cm強と浅い。南西半は後世のピットによる切り合いが激しく、主柱穴も失われてしまっているとみられる。

南辺で磨製石斧1点が出土した。年代決定の鍵となる遺物はきわめて少ないが、後述する弥生後期～終末の掘立柱建物とみられるSB41の柱穴に切られること、遺構の分布状況から見て弥生前期の墓群よりは後出とみられることから、弥生中期とみておきたい。

出土遺物 (図19、図版12)

27は玄武岩製太形蛤刃石斧である。長さ15cm、最大幅7.1cm、厚さ4.7cm、重さ750.5gである。



0 10cm

図19 SC21および出土遺物実測図 (S=1/40, 1/2)

## 溝

### S D01 (図4、図版9)

調査区南隅部で検出した。検出長1.2m、幅0.4m、深さ0.13mである。瓦器椀が出土しており、平安時代末期に属す。

### 出土遺物 (図20、図版12)

28は瓦器椀である。口径17.1cm、器高5.0cm、高台径7.1cm。体部外面下半に一部指押さえを施す。

### S D03 (図4・20、図版9)

調査区西隅付近で検出した南北方向の溝で、検出長14.5m、幅1.7m、深さ0.72mの断面逆台形である。土層断面から掘り直しをしている可能性がある。古墳時代終末の須恵器蓋杯、凸面縄目たたきの瓦、須恵器壺片、ヘラ記号を記した須恵器片1が出土している。南方に位置する那珂遺跡群では、7世紀から8世紀に属す真北方向およびそれに直交する暗茶褐色粘質土を覆土とする断面逆台形の溝が検出されている。S D03はその特徴に近く、関連がうかがえるが、南端でやや南東方向に曲がっている。

### 出土遺物 (図20、図版12)

30は玄武岩製の太形蛤刃石斧である。残存長5.4cm、幅5.2cm、厚さ3.9cmである。

### S D04 (図4、図版9)

調査区中央をほぼ南北に沿って走る溝で、検出長23.5m、幅1.1m、削平のためか深さ0.1mと浅い。S K08に切られ、弥生土器を含むピット群を切っている。先述のS D05で終わっている。須恵器、土師器壺もしくは壺の把手が出土している。古墳時代後期に属す。

### 出土遺物 (図20)

29は須恵器の杯身である。復元口径12.7cm、残存高3.5cm、立ち上がり高1.1cm、受部径15.0cm。青灰色で胎土は密、焼成は良である。

### S D06 (図4、図版9)

調査区南西部で検出した。検出長25.0m、幅1.0m、深さ0.6mである。遺物は弥生から中世の古い時期の遺物が出土しているものの、覆土が灰褐色上で、S D03、04を切っており、検出遺構の中で最も新しく、近世のものと思われる。調査区東隅部に同様の溝S D31があり、ほぼ直交する位置関係にある。

### S D31 (図4)

調査区東隅で検出した。検出長3.35m、幅0.37m、深さ0.11m。覆土は淡褐色土で中世の土坑SK23を切る。位置関係からS D06と直交するものとみられる。近世であろう。

### S D10 (図4・20、図版10)

調査区南東辺で検出した東西方向の溝で、検出長3.54m、幅1.0m、深さ0.3mである。瓦器椀、滑石製鏡が出土している。先述したとおり、滑石製鏡の破片がSE 15破片と接合した。平安時代末期に属す。

### 出土遺物 (図20、図版12)

31・32は瓦器椀である。31は復元口径16.8cm、器高5.2cm、高台径6.1cm。体部下半に指押さえを施す。32は復元口径16.4cm、器高5.1cm、高台径7.0cm。体部内面にヘラミガキを施す。

### SD32 (図4)

調査区南西部で検出した。検出長10.0m、幅0.8m、深さ0.2m。SD06に切られ、SD03を切る。走向はSD10と同一で、関連性がうかがえる。遺物は白磁、土師器などが出土している。中世に属す。

### SD02・11 (図4、図版10)

調査区南半で検出した。検出長12.6m、幅0.42m、深さ0.1m。SD06に切られる。削平で途切れていますが、走向、幅などから同一のものとみられる。走向がSD10・32と沿っており、関連性がうかがえる。遺物は白磁、土師器などが出土している。

SD03 土層断面図

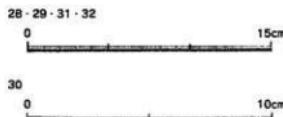
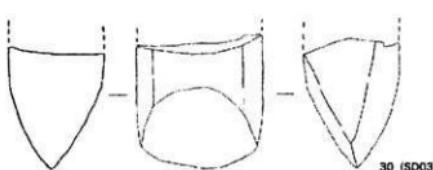
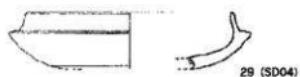
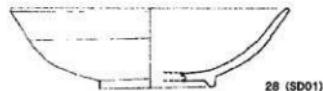
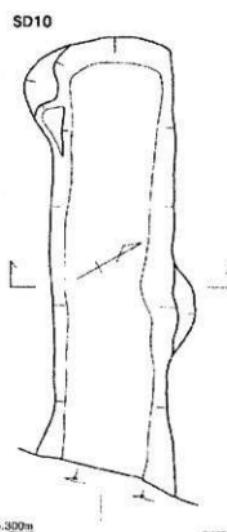
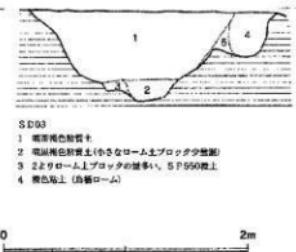


図20 SD03・10および溝出土遺物実測図 (S=1/40, 1/3, 1/2)

### 据立柱建物

#### S B40 (図21、図版10)

調査区南端で検出した2間×2間の南北棟である。建物主軸は磁北、柱間寸法は1.2~2.5m、ピットの深さ最深で0.85mである。南西隅のS P454で2個体の割れた甕が一方を逆さに倒置、他方を横からあてがうような状態で出土した。建物廃絶の際に柱痕に意図的に置いたものか。建物廃絶祭祀の一例として注目できる。甕の形態から弥生後期に属す。

#### 出土遺物 (図23)

33・34は甕である。33は復元口径15.4cm、器高17.8cm、底径5.2cm。外面は浅黄橙色、内面は淡橙色で、1~2mm大の白色砂粒を多量含む。調整は内外面ともに口縁部が横なで、体部がハケ目である。34は残存高17.3cm、底径6.9cm。淡橙色で、1~4mm大の白色・灰色砂粒を多量含む。調整は内外面ともに口縁部が横なで、体部がハケ目である。33を逆さに倒置、34を横からあてがうような状態で出土した。

#### S B41 (図22)

調査区南東部で検出した1間×2間以上の南北棟である。建物主軸はN9° Eである。柱間寸法は2.3~2.7m、ピットの深さは最深で0.62mである。北東隅のS P533で甕が出土している。弥生後期~終末に属す。

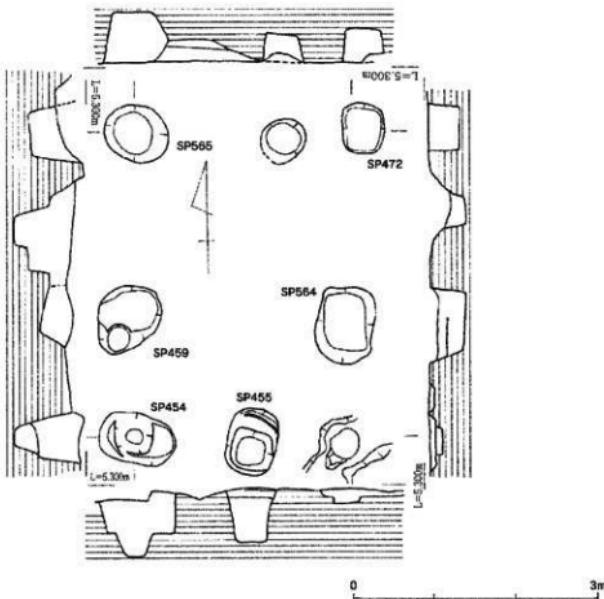


図21 S B40実測図 (S = 1 / 60)

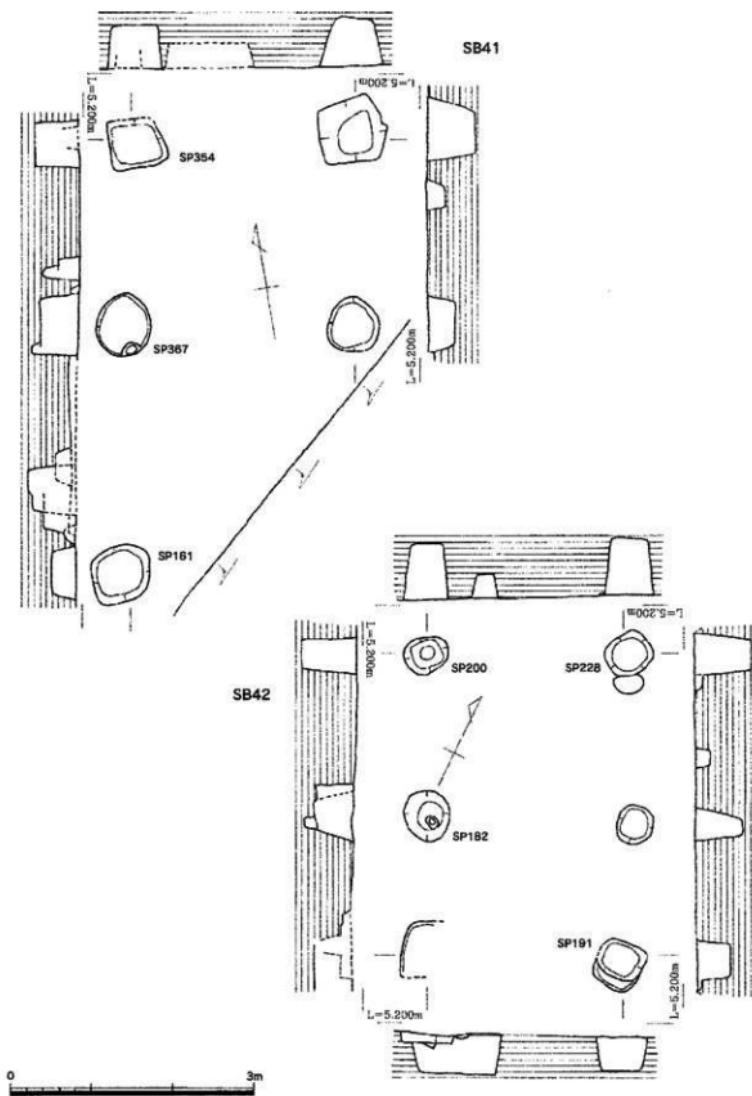


図22 S B41・42実測図 (S = 1 / 60)

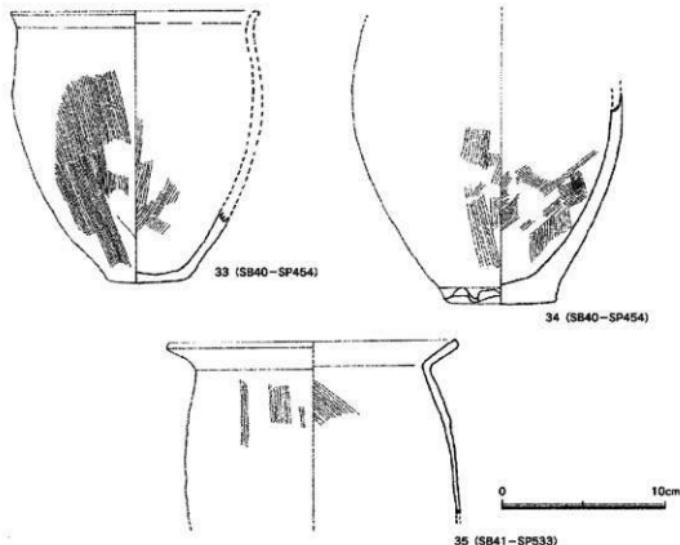


図23 SB40・41出土遺物実測図 (S=1/3)

#### 出土遺物 (図23)

35は甕である。復元口径17.7cm、残存高11.1cm、浅黄橙色で、1mm大の白色砂粒を含む。調整は内外面ともにハケ目である。

#### SB42 (図22)

調査区東隅で検出した1間×2間の南北棟である。建物主軸はN25°W、主軸方位やピットの形状がSB40・41と異なること、ピットの出土遺物の検討の結果、弥生土器も含まれるが中世の磁器類があることなどから、中世に属すとみられる。

#### その他の出土遺物 (図24)

36は土錐である。残存長5.3cm、幅1.4cm、浅黄橙色を呈す。SP435出土。37は打製石錐である。黒曜石製で残存長3.55cm、幅1.55cm、最大厚0.6cm、表裏面とともに丁寧な押圧剥離を施す。先端は破損、基部・両脚は使用時の欠損とみられる。調査区南西部の遺構検出時に出土した。38は滑石製白玉である。径1.0cm、厚さ0.4cm。調査区南西部の遺構検出時出土。

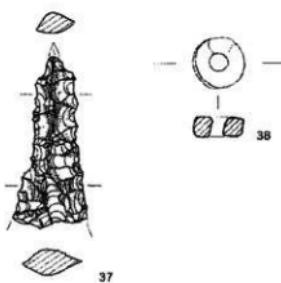


図24 その他の出土遺物実測図 (S=1/1)

## 第4章 まとめ

最後に検出遺構の時代別変遷を概観し、それらから派生する問題など考察を記してまとめとしたい。本調査における検出遺構の時代は、I 弥生前期中葉～末、II 弥生中期、III 弥生後期～終末、IV 古墳終末、V 平安後期～鎌倉前半、VI 近世の6期に大別できる。

### I 弥生前期中葉～末

調査区南東半に木棺墓8・甕棺墓4からなる墓群が形成される。木棺墓は、ほぼ磁北に沿った南北方向の1群（SR18・19・24・25・26）とそれに直交する東西方向の2群（SR27・28・29）からなる。甕棺墓は小児棺（ST09・12・30）3、成人棺1（ST17）である。築造順序を福井小塙および甕棺の型式、切り合いから検討してみる。なお甕棺は構口達也氏の編年を用いる。

木棺墓1群 SR19→SR24→SR18 SR25・26は切り合い・副葬物がなく不明

木棺墓2群 SR29→SR28→SR27

甕棺墓群 ST17→ST12→ST30 ST09は脇部片のみで不明

墓群全体での最古は板付IIa式にあたるSR19・SR24、横口編年K1a式にあたるST12・17とみられる。次にSR29が続き、最新がST30と考える。その他の木棺墓・甕棺墓は切り合いなど直接的な手がかりがなく、前後関係が決定できない。

第2章で記述したように、山王遺跡はもともと表探資料によって設定されていた経緯があり、墓域の位置・範囲も漠然としたものであった。今回の調査結果は調査実績の少ない山王遺跡では初めてであり、弥生の墓域が前期中葉にまで遡ること、現在の御笠川沿いに展開する可能性を示すこととなった。筆者が民間開発事業に伴う事前審査で行った試掘においても、御笠川に極めて近い地点で甕棺を検出した（図2のドット地点）。遊離した断面三角突帯が出土したことから、中期と見られる。

また近隣では類例が少なく、直近では那珂32次例が知られる程度である。隣接する比恵遺跡群では2011年1月現在調査次数は123次に上り、貯藏穴などの生活関連遺構は検出されているが前期の墓域は確認されていない。弥生前期における比恵遺跡群との関係を明らかにする上で貴重な資料である。福岡市内、福岡平野に限って見れば、福岡空港の南東に位置する下月隈天神森遺跡3次、雜飼隈遺跡15次例が知られる。前者は丘陵端部に24基の木棺墓が二列埋葬されているとともに40基の甕棺墓が検出されている。後者は4基の木棺墓が検出され、弥生早期の夜白式壺と磨製石剣が出土している。

これらの諸例と比較して興味深い点が2点ある。まず第1は木棺墓における小塙の副葬位置である。天神森例を基準に、小塙の副葬位置を頭位と仮定した場合、次の4パターンに分かれる。

### 1 左斜後方、2 右斜後方、3 直上方、4 棚中央

このほか1と2の併用、墓坑の側辺中央で頭位が不明なものがある。このパターンに照らした場合、雜飼隈15次例は3、山王6次例は1にあたる。これらの相違の理由として、時系列または副葬法の系譜によるものが想定できるが、ほぼ年代が近接している天神森例で複数のパターンが見られることから、後者によるもの可能性がある。市外の例も含めて検討する必要がある。今後の課題としたい。

第2は墓群の規則的配置である。天神森例では二列である。山王6次例は東西と南北両方向からなり、それぞれ群において軸線をそろえ、墓群全体として比較的まとまった範囲を示す。板付遺跡では方形墳丘墓の可能性が指摘されている。山王6次例では遺構の削平が著しく、墳丘の存在を指摘できるまでの積極的根拠はない。ただ残念ながら現在確認不能であるが、墓群はおそらく調査区南側の道路に広がっている可能性が高い。

## II 弥生中期

調査区南半に竪穴住居S C21、井戸S E16・05が造られ、前期には墓地であった一帯が集落域となる。

## III 弥生後期～終末

中期に集落となった調査区南半は、弥生後期の後半～終末に磁北にはほぼ近い主軸方向を持つ獨立柱建物群からなる地域に変わる。決定的な配列を見出せなかつたが、今回復元したもの以外にも暗黒褐色粘土質土を覆土とする比較的大きな柱穴が調査区南端部に集中しており、建替や他の建物が立て込んでいた可能性がある。

以上弥生時代を通して、調査区北半にはS E05を除いてこの時期の遺構は展開していない。弥生時代の遺構の北限を示している可能性がある。残念ながら、弥生前期の墓地や後期の建物群の中核部分は南東側の道路下に展開しているのであろう。道路を越えてさらに南東部に展開するのか否か、今後の調査が期待される。

## IV 古墳終末

6世紀～7世紀の須恵器蓋杯片を含む溝S D03・04が掘削される。このうちS D03は遺構説明で述べたように、南方の那珂遺跡群で検出されている正方位の溝群と関連する可能性がある。近隣では比恵6次のS D04、同100次のS D02が検出されており、いずれも東西方向である。S D03は南端でやや曲がっており、どのような延長ラインを示すのか気にかかるところである。深い遺構で完全な削平を受けることなく残されており、この溝の南北延長部は注意が必要と思われる。

## V 平安後期～鎌倉前半

本調査で検出された小さなピット群の大半は、この時期に相当すると見られ、調査区全面に広がつており、極めて活発な開発が行われたと見られる。弥生の豪棺も穴があけられ搅乱が激しい。獨立柱建物S B42、井戸S E14・15・33、溝S D10・32・02・11、土坑S K20・23が展開する。調査時には注意が及ばなかつたが、整理の過程で気づいた点として、溝群の関係がある。S D10と32は走向が同じであり、両者の間に5.7mの途切れた部分がある。両溝の南側に平行してS D02・11が走る。両溝ライン間の距離は内々で2～2.5mである。この部分が道路に当たり、途切れた部分が出入り口だったとも考えられる。またS D10とS E15で出土した滑石製鍋片同士が接合したことから、ほぼ同時期に機能・廃棄され、以上の遺構群が有機的に結びついていたことを強くうかがわせる。この集落にやや先行するかほぼ同時期に土坑墓S K08・13が造られ、混在する形となっている。土器を比較するとS K08がS K13よりやや古い。埋葬方法の面でも本資料は興味深い。S K13の墓坑底面近くに残存していた仕口のある2本の炭化材から、担架のようなもので遺体を運び込み、そのまま埋葬し、その後土師器Ⅲを頭辺に置いたのであろう。博多遺跡群では、上呂服町で実施された26次調査で木棺を運び込んだと見られる棒材が木棺の傍らに残されていた事例が知られる。埋葬の手順がうかがえる資料は、それに関わった人々の死に対する考え方方に迫りうる素材として貴重である。

以上のとおり、山王6次調査では各時代にわたって遺構が展開し、土地利用の変遷過程が明瞭に把握でき、また個々の時代の研究にとって、興味深くある意味では基準となりうる事例をもたらしたことが特徴といえる。調査担当者として今後もこの調査に関わる資料を追求していきたいと考えている。

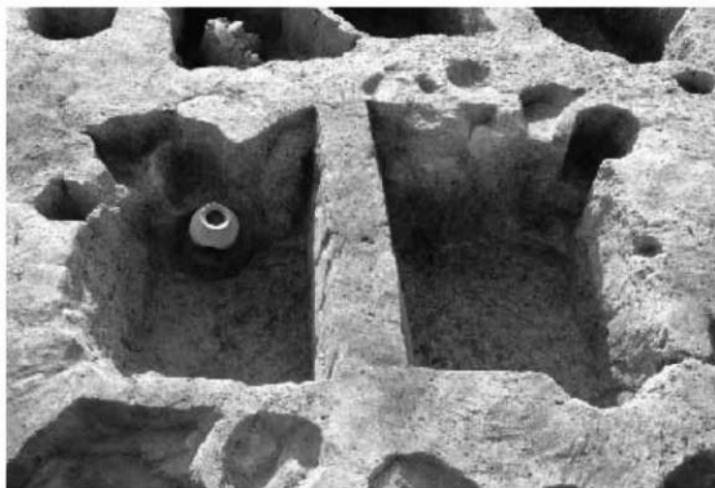


調査区全景（北東から）



調査区南壁土層断面（北から）

図版2



S R 18 (東から)



S R 18副葬小壺出土状況 (東から)



S R 18土層断面 (北から)



S R 19 (東から)



S R 19副葬小壺出土状況 (西から)



S R 19土層断面 (南から)

図版4

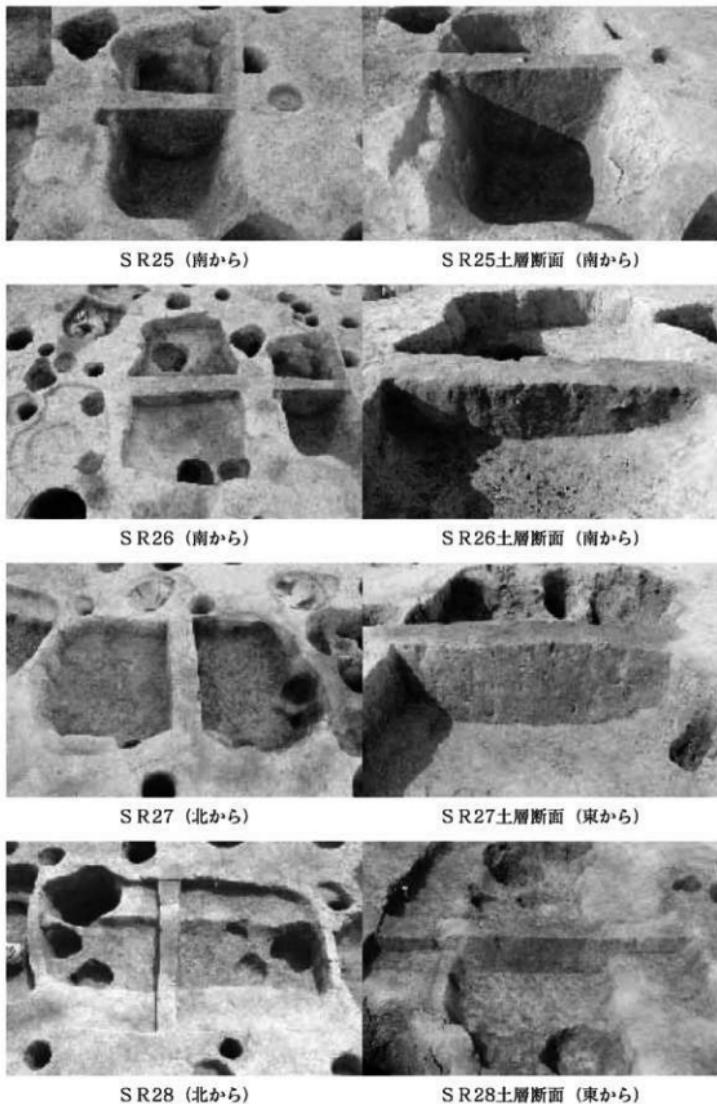


S R24 (東から)



S R24土層断面 (南から)

図版5



図版6

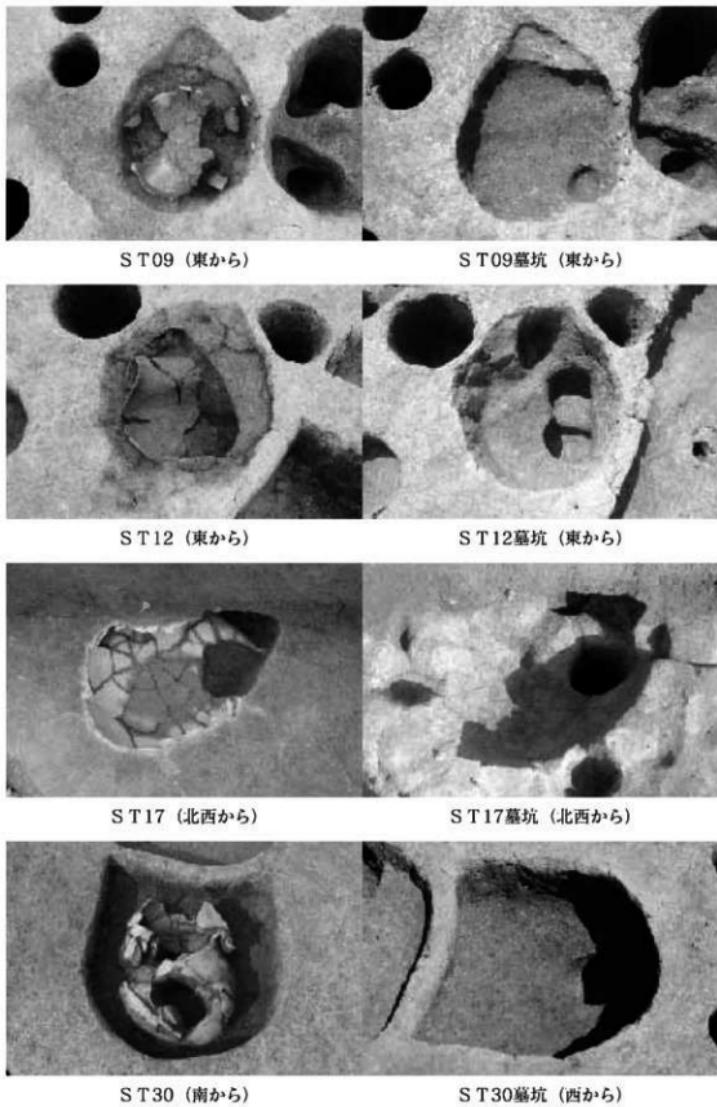


S R29 (北から)



S R29土層断面 (東から)

図版7



図版8



SK08 (南東から)

SK13 (南東から)



SK20 (北東から)

SK23 (東から)



SE14 (南東から)

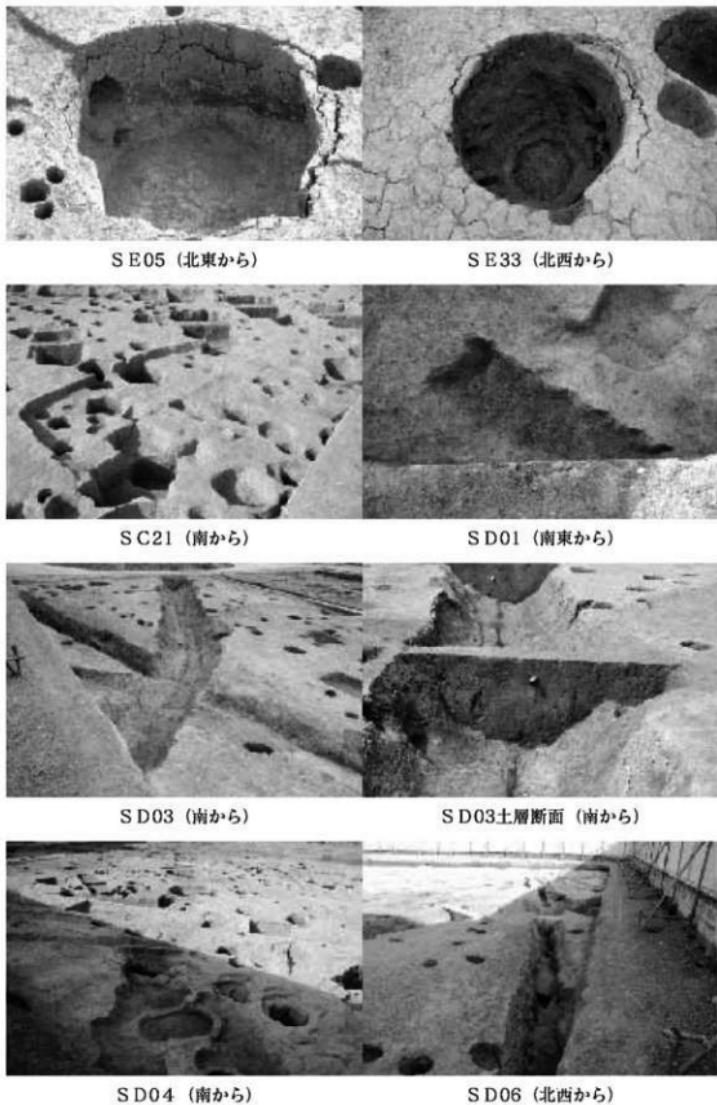
SE14 土層断面 (南西から)



SE15 (南東から)

SE16 (南東から)

図版9



図版10

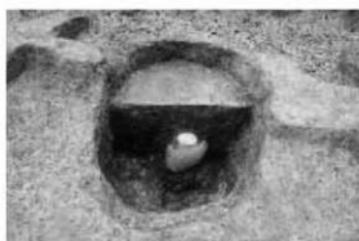


SD10 (南東から)

SD11 (西から)



SB40 (西から)

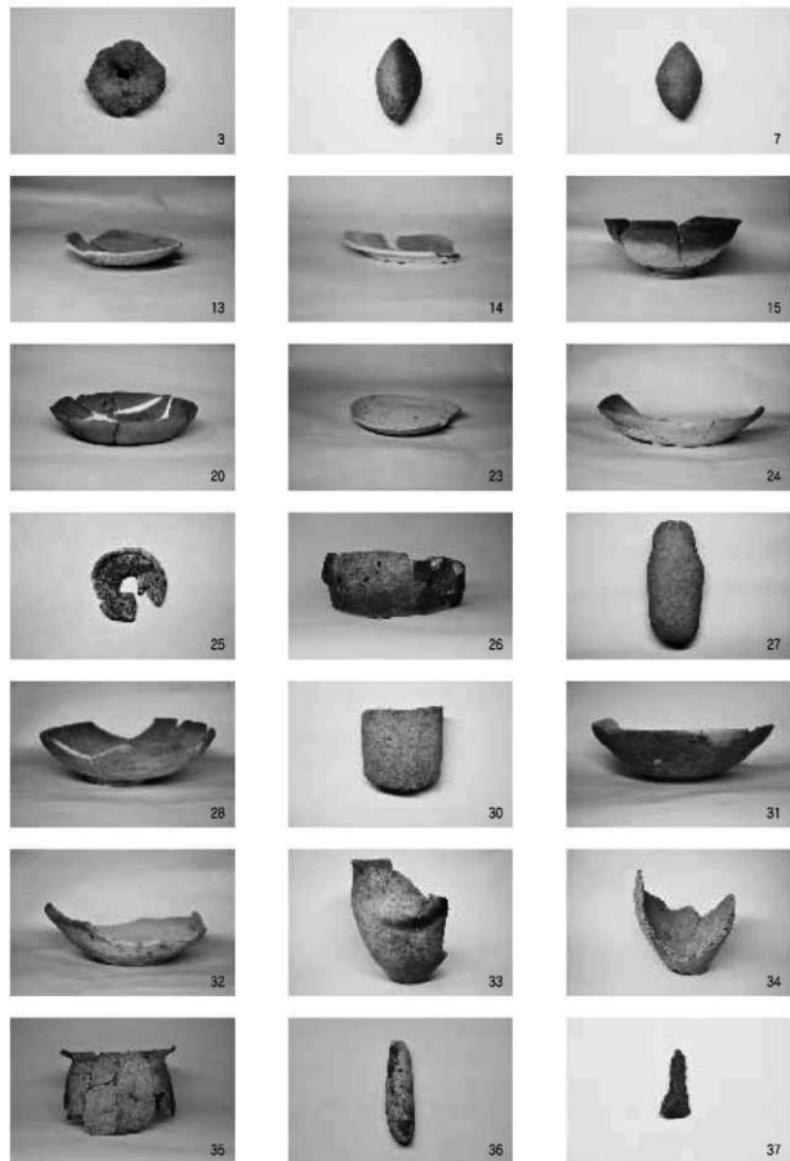


SB40南西隅 SP454 発出土状況 (西から)

図版11



図版12



- 報告書抄録 -

ふりがな	さんのうご									
書名	山王5									
副書名	山王遺跡第6次調査報告									
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書									
シリーズ番号	第1116集									
編著者名	木下博文									
編集機関	福岡市教育委員会									
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1									
発行年月日	2011年3月18日									
所取遺跡名	所取遺跡名	ふりがな		コード		北緯	東經	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
		市町村	遺跡番号	40130	2379					
さん のう い ゃく 山 王 遺 跡	ふくおかし はかたくさんのが 福岡市博多区山王	33°	130°	20090216～ 20090423	580	記録保存 調査				
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構				主な遺物	特記事項		
山 王 遺 跡	集落跡	弥生～中世	土坑、土坑墓、木棺墓、甕棺墓、溝、竪穴住居、掘立柱建物、井戸、柱穴				弥生土器、土師器、須恵器、中国磁器、石器、鐵器	弥生時代前期 中葉～後葉の 木棺・甕棺から なる墓群を検出		
要約	山王遺跡は那珂川と御笠川に挟まれた中位段丘上に位置する複合遺跡で、谷筋を挟んで比恵遺跡群の東側に位置する。今回の調査地点は遺跡の東部に位置し、すぐ東側は御笠川が流れる、標高5～6mの場所である。遺構は現地表下20～50cmの鳥居ローム層上面で検出した。小廠を認めずした弥生前期の木棺墓、小児用甕棺墓、弥生中期の井戸、弥生後期～終末の掘立柱建物、古墳後期の溝、古代末～中世初頭の土坑・溝・井戸・土坑墓、柱穴多数を検出した。									

山 王 5

山王遺跡第6次調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1116集

2011(平成23)年3月18日

発行 福岡市教育委員会  
〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 友盟社印刷有限公司  
〒815-0061 福岡市南区那の川1-13-16